The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	CALLと言語テスト
Author(s)	今尾, 康裕
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2011, 12, p. 53-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CALL と言語テスト

今尾 康裕（大阪大学 言語文化研究科 言語文化専攻）

コンピューターを教育に利用する場合には、その評価にもコンピューターを使うことが理にかなっていますが、どのような教材を作ってどのように教えるかということに比べて、コンピューターを使った評価法に関してはあまり議論されていないように感じます。今回、この場で機会をいただいたので、言語テストを中心に、教育現場でのコンピューターを使った評価において考慮すべき点に絞ってお話をしたいと思います。言語テスト全般でのコンピューター利用に関する詳しい議論については、Chappelle and Douglas (2006) や Ockey (2009) などを参照してください。

まずは、評価法・言語テスト一般の話から始めます。コンピューターを利用するか否かに関わらず、言語能力を評価するにあたっては、「どのような目的」で「何」を知りたいのかをはっきりとさせることが重要になります。言語教育の現場では、学習者のレベル分け、言語能力の把握、学習・習得したかどうかの確認などを目的として、言語能力一般、特定の言語能力、授業で扱った言語能力などを測定・評価することが多いのではないでしょうか。

特に教室レベルでは、学期・単元の初めなどに、その学期・単元で教える単語や文法項目、または扱う内容を理解する上で必要な言語能力を把握するために、特定の言語能力を測定することもあるでしょう。また、学習者が目標とする言語能力を習得・学習したかどうかを確認するために、授業で扱った内容や学習しているべき能力を単元テスト、期末テストという形で測定するというのが一般的に行われている評価法ではないでしょうか。

言語テストや心理学などの用語では、この測定したい能力のことを「構成概念（construct）」と言います。一般の英語能力テストなどでは、英語を聞く能力といった言語能力そのもので定義する場合が多いのですが、教育現場では単元ごとや学期末に学習者が身につけているべき言語能力の目標など、シラバスを基に定義することになります。そして、構成概念を実際に測定できるテスト課題・問題にする手続き、「操作化（operationalization）」を行います。つまり、どのような能力をどう測定するかを具体的に決める作業です。例えば、扱う文法項目、どのような問題形式にするか、またどのように採点するかなどを決める段階です。この操作化の段階で、どのようにコンピューターを使うのかも考えることになります。

コンピューターを使った言語能力測定もこれまでの紙ベースのテストと同じように長所・短所があり、万能ではありません。詳しくは前出の Chappelle and Douglas (2006) や Ockey (2009) などを参照してもらうとして、ここでは、その中でも扱われているいくつかの点を挙げておきます。

まず、長所としては、1) CALL 教材と同じく、これまでの紙ベースのテストでは困難であったマルチメディアを使った問題などが作成できる。2) 問題の形式にもよりますが、テスト終了後すぐに結果を含めたフィードバックを学習者に提供できる。3) テストを受ける時間、場所などの制約がなくなる、など。短所としては、1) 準備に資源と時間が必要となることが多い。2) コンピューターテクノロジーの制約を受ける。3) テスト問題のセキュリティを確保することが難しい、など。これらの内いくつかは、おそらく CALL 教材にも言えることではないでしょうか。

ただ、ここで挙げた長所と短所は、それぞれ全く別の物ではなく、表裏一体となっています。新しいテクノロジーによって可能となることも出てきますが、何でもできるわけではありませんし、その準備に必要となる人的、金銭的資源を考慮しなければなりません。フィードバックなどもすぐに提供できる

ようにするには、事前にそれなりの準備が必要となります。また、テストを受ける時間や場所の制約がなくなれば学習者にとっては便利になりますが、セキュリティを考慮する必要が出てきます。これは、テストを受ける学習者にとってその結果がもたらす影響が大きければ大きいほど重要になります。小テストや自習用の練習問題としてはあまり問題にならなくても、期末テストでは真剣に考えなくてはいけないということです。

大阪大学においては、コンピューターを使ったテストとして最も身近な物は、WebCT のアセスメントツールでしょう。ただ、このツールは問題形式などを含めた制約が多く、準備にもかなりの時間が必要となっていて、お世辞にも使いやすい物とは言えません。また、セキュリティの面でも、自習用や小テストとして使うにはそれほど問題はありませんが、期末テストで使うには心もとないものです。これでは、教員に利用を促したところで、利用する教員に対して何かしらのサポートがなければ、受け入れられる可能性はあまり高くないのではないでしょうか。

では、これ以外のツールを開発して、これまでできなかったことができるようになったからすぐにテストで使うべきかというと、必ずしもそうではないでしょう。上で述べたように、何かを評価するには、どのような目的で何を知りたいか（測定したいか）から考えなくてはなりません。Ockey (2009) が言及しているように、新しいテクノロジーで可能になったからというだけで新しい問題形式をつくることはとても危険です。このような場合、その問題形式で測定できる能力が、目的に沿った物で、測定したい能力（構成概念）と一致するかなどを十分検証する必要があります。また、現場の教員にとっては、問題作成、採点（の準備）などの負担が軽いことがとても重要です。

現状では、まだまだ問題点も多いですが、将来的にはコンピューターを使った評価法・テストが普及していくのは間違いありません。CALL 研究者と言語テスト研究者が協力して、コンピューターを利用した妥当性の高い評価法・テストを作っていくことがますます重要になっていくのではないでしょうか。

参考文献

Chapelle, C. A. and Douglas, D. (2006). *Assessing language through computer technology*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Ockey, G. J. (2009). *Developments and challenges in the use of computer-based testing for assessing second language ability*. The Modern Language Journal, 93, 836–847.